

種文学賞 令和六年第一回目 作品集 下卷

令和六年第一回目の種文学賞は、

・小学三～四年生の部「新しい学年になったら」

・小学五～六年生の部「はじまりの神話 step.1」

中学生の部「はじまりの神話 step.2」

というお題で作品をつのり、最終的に全十二名による力作がそろいました。

この下巻では、中学生の部の作品の発表と、受賞者の発表、

また山分けいぶんによる講評を掲載しています。

※ 執筆しつぴつしや者の学年は、令和六年三月時点のものです。

目次

〈中学生の部〉	
キウイフルーツ	…… 五ページ
ドイル	…… 七ページ
ドリームさん	…… 八ページ
マツタケ	…… 十ページ
チエチエズ	…… 十二ページ
〈受賞者発表〉	…… 十三ページ
〈講評〉	…… 十四ページ

◆◆ 中学生の部 ◆◆

この部は、小学五～六年生の部と同じく「はじまりの神話」

がお題ですが、ひとつ異なるのが、自分が工夫したところや力を入れたところについて三百字以内の文章でアピールするという課題が加わっている点です。

この、作品のみどころを書いた文章も掲載していますので、ぜひそちらも楽しんでお読みください。

冬眠のはじまり

キウイフルーツ(中二)

ある森をうるおす神がいた。その森に住む動物はいつもその神に感謝している。そんな動物達は、神に感謝の意を示したいと、三ヶ月

に一度季節の変わり目に地上に降りてくる神に祈りをささげる事を行っていた。森の神の象徴でもある太くて背の高いその森特有の木と季節ごとに採れた木の実などのおそなえ物に動物達は祈りをささげていた。かれこれこの行事は三百年以上続いている。

動物達の先祖から続いているこの行事には必ず守るべき約束事があった。それは神を絶対に見てはいけないというもの。おりてくる神に祈りをささげる以上それは難しいのではないかと思うかもしれないが、神がおりてくる時も祈りをささげる時も神は覆おほいにかくされている。

しかし、ある秋のことだった。このときは木の実があまりとれなく、動物の中にも餓死がししゃ者がでており、動物達の間にも不安とストレスがたまっていた。一匹の熊とその仲間の狐の間で

「俺達は毎度毎度誰に祈っているのかわからない。神を見れないなら

祈りをやめたっていい」と不満がわいた。すると、次々にその不満が森中の動物達に広がっていき、ついには次の儀式のときに神を見ようという計画まで立ってしまった。その計画はいたって単純で、祈りをささげている時に皆で覆いの中まで突入しようというものだった。神はその計画を知らずに秋から冬の変わり目の際の儀式が行われた。始まってから数分、儀式はいつも通り行われていると思われたが、熊の合図と共に、動物達が皆一斉に覆いの方へと突入した。あたりは一気にさわがしくなった。しかし、覆いをめぐる寸前で、状況の変化に気づいた神はさっと姿を消し、計画は失敗に終わった。

後日、神は激怒し、約束を破った動物物に対し、もう一度この森に降りてくるまでの間、行った事を見つめ直し、十分に反省させるために、その森にいた全員の冬の活動を禁止した。そうして冬眠ということばが生まれた。今でも冬眠をしていない動物は、当時の森にいなかった。

たか、この三百年の間に新しく生まれた動物で、どちらにせよ運のいい動物達であることには間違いない。

(作品の見どころ)

この作品を書いた時に特に力を入れた設定があります。それは、ある秋に動物達の間で神を見ようという計画が立った場面です。設定として、初めは「ある秋のこと」のみで、その後の「森の不況により動物達の間にはストレスや不満がたまっていた」というものはなかったのです。しかし、前者のみだと、一匹の熊と狐との間に急に不満が生まれるのは無理があると思ひ、後者を付け加えた事で、不満が生まれたことのリアルな理由ができ、物語の流れにさらに臨場感をだすことができました。

また舞台が「森」ということで、祈りをささげる時も、神社にある

ような鏡ではなく、森らしく「木」や「木の実」にすることにすると、
うちよつとした工夫もしました。

太陽、地球、月の過去

ドイル(中一)

遠い昔、宇宙は一つの国であつた。その中の一番えらい王はサンと
いう名の者。この者はいつも大変いらいら腹を立てている者だつた。こ
のサンにはたくさんの家来がいる。その中にアース、ムーンという名の
者がいた。まず、アースはいつも腹を立てているサンのことをなんとか
落ちつかせようと、それはかり考えて必死に働いていた。一方、ムーン
という者は心から深くアースのことを愛していた。そんなムーンはア
ースがサンを落ちつかせるのに必死で自分にまったく目をかけてく
れないことを気にしていた。そこでムーンはアースがサンを落ちつか

せるためにサンの大好物の水をサンにあたえていることを思い出し、
その水を使った。この国ではそれぞれ家来に一月ごとに給料とし
て水があたえられていた。この水を食事として家来達は過ごしてい
たので水は家来達にとつても大切な物であつた。ムーンは自分の
一月月分の分け前の水をすべて、サンを落ちつかせるために、アース
にわたしてしまつたのである。そうすればサンも水をたくさんもらつ
て落ちつきアースが自分に目をかけてくれると思つたのだ。

翌日、神はまだずっとイライラしているサンを見て激怒した。そし
てサンをかためて星にしまおうとした。しかし、その魔法があま
りにも強すぎたためサンの周りのアースやムーンや他のけらい達ま
で星になってしまつたのだ。そうして宇宙の太陽、地球、月ができた
のだ。そして今も太陽は燃えるように熱く、地球はそのまわりをま
わっている。月は水がなく地球のまわりを今でもまわっている。

(作品の見どころ)

まず、読者に注目してほしいところは神話の中での登場人物の性格と現実の中での天体の特徴の共通点です。その共通点を見つけて考えながら読むと物語が理解しやすくよりおもしろくなるからです。工夫したところは二つあります。まず一つ目は神話の中で登場人物が行ったことが現実の天体のそれぞれの特徴につながっているのではなく、登場人物の性格や心情がそれにつながるようにしたことです。次に二つ目は、神話の中で現実にはぜったいにないような「水を給料にしている」と、おかしい感じを入れたところです。こうすることで普通の物語ではなく、神話を読んでいる感じが出ると思っています。「水を給料にしている」という設定にしました。

一日というものが生まれた訳

ドリームさん(中三)

とても遠い昔、世界は真つ暗闇に包まれていました。神々はこの暗闇を消す方法を模索し、神同士で相談し合い、色々な考えをうみだしました。そしてそれをためたりしましたが一向にこの真つ暗闇が消えることはありませんでした。そこでとある神がひとつの案を思いつきます。それは天空の神であるソライジンでした。ソライジンは、神々の中から希望を生み出せる神ノゾミガミを見つけ出し相談しました。

「ノゾミガミさま、どうかこの真つ暗闇を消す方法を教えてください」と。ノゾミガミは微笑みながら答えました。

「私の兄である時間の神トキノヌシは、時を制御し、世界が秩序を保てるようにする力を持っています。兄の力を借りれば、暗闇を消して何かしらの方法を思いつくでしょう。」

ソライジンはトキノヌシの所へ向かい、彼に暗闇を消す助けを求めました。トキノヌシはその後考えぬき、光というものを生みだしました。またそれに加え、光が出てきたり消えたりする時間の周期のしくみを創造しました。ソライジンはとても満足し、自分の家に帰り、周りの神々たちに成果を話しました。

しかし、色々な神々たちと話していくうちに、とてつもなく重要なことを決めていなかったことに気がつきました。そう、一周期の区切りと名前を決めていなかったのです。ソライジンは慌ててトキノヌシのところに戻りましたが、そこには姿がありませんでした。そのことをノゾミガミに話してみると、

「彼は長い旅に出ました。いつ帰るかは私も知りません。何があったのですか」と答えが返って来ました。ソライジンが問題の件を伝えると、ノゾミガミは考え込んでこう話しました。

「兄の友達の中の一人に確か、命名が出来たり区切りを創ったりできる神メイザンシンがいたはずですよ。その神に言えば、何かいい案が出るはずですよ。」

ソライジンはすぐにメイザンシンの所へ向かい、問題の件を伝えました。するとメイザンシンはまるでその一件の事をずっと考えていたかのようにすぐこう答えました。

「『日』という名のサイクルとし、その一日の終わりに光がうまれるように設定しよう。その区切りを始めたタイミングから暗闇を打破するための力を蓄積しつづけ、最後にその溜^たまった力を一気に開放

することによって光が生まれるようにしよう」

と。ソライジンはこの名案に感動し、とても喜んで帰りました。その後、ソライジンはこの周期のしくみを世界に広げるために、周りにいる神々に伝えていきました。それからしばらくたって最初の一日が訪れたとき、暗闇は打ち解け、美しい光が世界に広がりました。これ以来、一日が繰り返されるたびに、世界は暗闇と光による交互の周期で包まれるようになりました。

(作品の見どころ)

「できるだけ日本の神話になるように物語を書く」これが今回制作するとき工夫したポイントである。太古の日本の神話にするため、外来語をできるだけ無くして日本語や漢語を使った。具体的にうと、最初に「エネルギー」という言葉を使ったがそれを修正して「力」

にすることで、設定に近づけるよう努力した。また、物語上に登場す

る神々の名前をカタカナで表した。これは逆に漢字で表記しないことによって、その神の役割が瞬時にわかり、物語を読むときに詰まることなく読めるようになるからだ。そして、物語の展開が安定的ではなく、途中でハプニングも起こるようにした。この三点をはじめと、様々な所に注目して、私の物語を読んでほしい。

地震の始まり

マツタケ(中一)

神、シンドは、宇宙に住む神である。彼は土をこねてそれに命を吹きこませ大地を作った。その大地に「人間」という、生き物の中で、最

強の生物を作った。人間は、生まれてからたくさんの知能を身につけ

ていった。それから一億年後、「マグニ」という人物が、人々を操作することのできる呪文をつくった。マグニはこれを使えば、大地を支配できると考え、早速、大地の人々にこの呪文を使った。絶大な効果があり、マグニは人々を支配することに成功した。

そのことをした神「シンド」は、怒りにたえきれなくなり、大地をなぐりつけた。それにより大地がゆれ、人々の作った建物などは、全て壊れてしまった。このことに恐怖を覚えたマグニは人々の支配をやめた。

地を揺らすシンドの一撃は、「地震」と呼ばれるようになった。地震は、人々が悪いことをするたびに、シンドが怒り大地をなぐりつけることで、不規則に発生している。

(作品の見どころ)

僕がこの物語で工夫したことは「水素」といった科学的な文脈で使われる言葉を使わずにあえて「呪文や」「大地」といった言葉を使ったことです。ここは最初前者のような言葉を使っていますが、先生に注意されて書き直しました。

他に注目してほしいのは、どうやって大地をふるわせるかということですが、できるだけ「プレート」などといった現実の言葉を使わずに考えた結果、シンドが大地をたたくという発想にいたりました。

まとめると、僕が工夫したところは、現実ではなく神話ということを意識したことです。

※この作品は制作時間が足りなかったため、「作品のみどころ」はできませんでした。選評からは外れますが、作品を掲載しますのでご覧ください。

力が強い神様

チエチエズ(中一)

昔々雲の上の世界では神々の中に、みんなからさけられている神がいました。なぜさけられていたかは力が強すぎるからです。その神は、ほかの神をさわっただけなのに、力が強すぎて、神自身はやさしくさわったつもりなのに、相手の神はなぐられている感じになります。そこで神は、きらわれさせられることをいやになり、動物に化けて身をおかくすことにしました。神はどの動物に化けるかと考えた時に大きな事実が判明してしまいました。それは、猫にしか化けられないと

いうことです。神は、その事を思い出し、猫に化けることにしました。そして、誰もいない所に行きました。そこは小さい島で、動物と植物しかいない所でした。そこで神は、動物を食べて過ごしていきました。この神が降り立った島は西表島（さいひょうじま）といい、化けた猫はイリオモテヤマネコといえます。

◆ ◆
受賞者発表表
◆ ◆

じゅしょうしゃはっぴょう

【佳作】

Z (小学三～四年生の部)

Aニ推タさん (小学五～六年生の部)

かず (小学五～六年生の部)

【優秀作品】

ドリームさん (中学生の部)

今回は、小学三～四年生の部から一作品、小学五～六年生の部から二作品、中学生の部から二作品が佳作対象となりました。そしてその五作品のなかですぐれている二作品を優秀作品とし、さらにそのなかの一作品を大賞として選出しました。

たいしょう

せんしゅつ

【大賞】

キウイフルーツ (中学生の部)

◆ ◆ 講評 ◆ ◆

今回は新学年になる前の三月終わりに提出ていしゅつとなる種文章でしたので、小学三〜四年生の部では、新学年になった自分を想像そうつろしてもらおうお題にチャレンジしてもらいました。

今回の三作品はどれも新学年にむけた自分の心からの思いをしつかり言葉にできていました。ただ、そのなかでは「Z」さんが自分の力だけで書き上げられた部分が大きかったという点で、ほかの二人をこえていたと思います。それで「Z」さんを佳作かさくに選ばせてもらいました。

小学五〜六年生の部と中学生の部は、自分だけの神話を作るというお題。特に中学生の部は、自分の作品のみどころを伝えるアピール文章せを添えるそということにしてみましたので、とり

わけ大変だったろうと思います。作品自体の質が高く、アピール文にも説得力があったのが「キウイフルーツ」さんでしたので、文句もんく無しの大賞に選ばせてもらいました。「森をうるおす神」という設定には美しい神秘性を感じますし、「神を見る」というタブーをやぶった罰ばつとして冬眠というものが始まったという発想は、本当に神話としてありえそうです（その一方で、確かな獨創性を感じるのがすばらしい）。最後には、冬眠をする動物としない動物のちがいについても言いおよんでいるというスキの無さも立派です。

優秀作品の「ドリームさん」の作品は、まず神々の名とその役割がよく考えられていたのが良かったです。闇を打ち払うための最初の助言をするのが「ノゾミガミ」（希望の神）であるというのいも粋いきな感じがしますし、その兄が「トキノヌシ」という

時をつかさどる神であるというの、深い神話的意味が眠っているように見えます。また、私が特に気に入ったのは、「メイザンシン」に相談をしに行った場面にある「メイザンシンはまるでその一件の事をずっと考えていたかのようにすぐこう答えました」という部分です。多くの人は、このような表現を気にとめないだろうと思いますが、こういう表現こそ文学の仕事だと私は考えます。

小学五〜六年生の部の「アニ推タさん」と「かず」さんは、どちらも物語の素材選びが非常に良かったと思います。「座る」というありふれた動作や、自分の家の近所の公園にある何の変哲もない場所（へんでっ）に目を向け、自分だけの神話を考えるというのは、とても素敵（すてき）でゆかいな頭の使い方です。また、「アニ推タさん」の物語は展開で楽しませてくれるものでした。とりわけ

「けむくじやらの怪物」という存在のあつかい方がとても上手かったと思います。そして、「かず」さんは、神と人間の関係のえがき方に、他の作品には無い発想がありました。「かず」さんは、物語を考える際に、参考として、教室にある日本の神話シリーズの絵本を読んできましたね。その準備が自分の作品を花開かせるのにきちんと役に立っていることを感じます。

残念ながら入賞（ざんねん にゆうしょう）しなかったみなさんも、全員すばらしい力作を出してくれました。今回も種文章をもり上げてくれてありがとうございます！ また次回もチャレンジしてくださいね。

（山分大史）